

仰臥二年暮れゆく年の寒けくに生きのびて居ることのうれしさ

野村完六君の歌集「山彦」の序

山川のはろけき國にうたひつつあるらむ君のおもかけに見ゆ

故溝口巖君の遺稿歌集の序

ありし日の君がなけきをそのままにわれはた病みて久しきろかも

續茅ヶ崎日記

熱高くなれぬ夜半の枕べにまさしく吾子が来て立ちにけり

思はぬに逝きし吾が子が夢に来てわれと遊び知る人なしに

枕べに吾子遊び居るけはひして目さめたりけり夜半の臥床に

妻より淑徳高女に奉職せる旨消息ありけれど

188 先生となりて淋しき日もあらむ春のあしたは袴は
きつつ

橋田東聲兄多用の身を以て屢わが病室を訪はる

さりともと歌に息づく君し見れば君ぞまさりてあ
はれなりける

病室と春

浦遠く海人の地曳のとよみつつ春の海邊となり
けらしも

よべの雨に松露出でつと朝かけに看護婦のこゑは
しやぎにけり

松山の朝のしめりにもえ出でてつぶら松露の香に
匂ふらむ

松かけに松露とらなと思へどもただにくやしもこ
もり臥しつつ

窓近く来て啼く鳥は金雀ひの聲あさかけさやに日は
照りにけり

189 窓近き松に来て啼く春の鳥ほがらほがらに朝たけ
につつ

190 年あけて次第につのる身のつかれ二月三月ふたたび起たす

これの世に生きのたつきを誤りて心いちづに病み果てにけり

かにかくにわが世は終れ弱りゆく身のいたづらに春立ちにけり

棄てはてて空しかる世に春は來ぬ身の衰へをうち詠めつつ

あらざらむ後を思はずおだやかに今朝うつそ身の夢さめにけり

松風六首

堪へて來しこれの月日の侘びしさも馴れてはうれし松風の音

ここをしも終の棲家とおもはねど夜を沈みゆく松風のおと

松風も絶えて音なき夜の室にひそかに死地を思ひ居しかな

191 真夜なかの冷えに背柱せきばしらのびえ痛みこらへて居るに松風の音

まつかぜのたえまにひびく潮騒や心はろけくなり
なむとする

ほのほのと窓にほのめくあかとき
の夢ともつかず
松風の音

折にふれて

いにしへの歌人憶良がくるしみもかくやと吾れの
病みもだえつつ

病みほほけ憶良が泣いて詠ひけむ歌のあはれさし
くしく思ほゆ

とこしへの命はねがへとこしへにいのち消ゆとも
何か恨みむ

秋の歌

ふみ馴れし庭の落葉やいつとなくわれの歎きを知
りてあるべし

よろよろと病餘の足のおほつかな秋の木原にわが
立ちにけり

久に逢ふ妹が頬の色さやかなれや木の葉もおどる
秋風の中

194 妹が頬のさやけきを見つつあきやまの木の下蔭に
長話せり

秋深きこの松かけに妹とあれば夢さやかなるわが
世なりけり

幾年を病み臥し居れやおのづから世に疎きよし秋
晴れつづく

床の上にふと松の葉を見つけたり秋風の日のその
青き松葉

おのづから枝をはなれてわくらはの地にまろびた
り風もあらなくに

時にまた地にまろべるわくらはの悶えもあらむ在
り佗びにけり

白粥もすするに馴れて白粥のかなしき味をおほえ
初めける

一切を棒にふりたる身のかろさや三歳やみふして
瘦せ果てにけり

梵音海潮音

195

手をくみて夜ごとの夢に聴くものか彼の梵音を海
潮音を

195 ひとすぢに胸に誓へる悲願ゆるこの世はさびし南
無観世音

おのづから御名を心に念じつついよよさみしきわ
が病かな

ひそやかに時雨のふれば目つむりて御名は呼ぶべ
し南無観世音

あらたふと吾が病むからに吾が佛おなじく病みて
ありましにけり

明月二首

松の葉に月の移れば青やかにふと月夜蟬なきいで
にけり

松の葉に月の移れば月のかけここにはささず蟲な
きしきる

病院構内に農場あり家鴨鷺鳥等を飼へり朝夕その騒ぐ聲わが病室まで響く

とのものは霜強からし家鴨のむれこの朝空にどよも
し啼くも

197 群れさわぐ家鴨と共に羽ばたくか鷺鳥のこゑは天
まで響け

窓

病室の窓より見ゆる松の木に朝は朝日の先づさし
にけり

病室の窓より見ゆる冬木空照りつかけりつ日もす
がらなる

松の葉をすきてわづかに空が見ゆ夕べとなれば茜
せりけり

枕べに冬のうす日の照りかけり思ひくらしして今日
も過ぎつる

髻法にいささか腹のおちつけば冬日照りたりわが
枕べに

足立哲太郎君の新婚を賀す

わかくさの妻とるすまひ朝鳥のほがらほがらにた
ぬしくぞあらむ

心づくしの濱菊の一鉢いやつきくに咲き出でてわが朝夕を慰むること幾旬し
かすがに暮秋凋落の風はわが窓をさへ訪れけり消息に代へて小椋俊子夫人へ贈
れる歌三首

寝ながらにわが眺め入る濱菊の下葉はややに色づ
きにけり

200 行く秋の日影とほしみ濱菊の蕾はつひに咲かざりにけり

濱菊の咲きのさかりも打過ぎて冬日みじかき窓のあけくれ

年暮れて腹膜炎を併發す思ひの果てに浮べる一首

われいまだ神をえ知らず然かれこそ神のまにまにある心地すれ

除夜

すがるべきもののかすかず縋り來てこの一筋に消えも入らなむ

みづからをこの一筋に生かし來て病みての今ぞ思ひしじなる

残されし仕事あるがに暮れ行けばもとな齡のくやしまれつつ

續々茅ヶ崎日記

201 きそのまま身は仰向にいねしまま年立つ朝の顔を拭きにけり

あと五年の命もがなと思ひてしその四年目の春と
なりにけり

ここに於て残んの春のありやなしや年ぞふたたび
あらたまりつる

うつそ身は成るにまかせてしづごころ思ひふけり
ぬ年の初めに

まだ生きてありしやと泣く人もあれな年のはじめ
のわが便り見て

うつそ身のまことの姿ひと目だに見しとはいまだ
思ほえなくに

あしびきの山のけものに身をかりて穴にこもらば
思ひ消なんか

あはれ身は木のはしくれかおのづから妻はらから
のうとまるる日よ

ともかくもならむ日まではしみじみとふみ讀みは
たや物を思はむ

この上に或は更にながびかむもとな命のおもほゆ
るかも

療養院と冬

あかつきの淺き夢みしスチームの流るるほどは日
のさめにけり

スチームの流るる音かまつかぜかけさの朝明の夢
わすれつも

東海の霜空とほくとどろくは馬入をわたる汽車に
かあらむ

法螺貝の浦どよもせば船待つと海人の子らかも騒
ぎたり見ゆ

松木立病舎の屋根は朝にけに松葉をのせて露にそ
ほちぬ

病室の屋根より高き庭松のしづ枝はのびて軒端を
這へり

病室の屋根にとどかぬ庭松のほづ枝はさやる風吹
くなべに

隣室の患者は女うらわかく笑ふこゑせしが咳き入
りにけり

看護婦の代りしならむ隣室に物つつましき話ごゑ
きこゆ

濱べより歸り來りし看護婦の白衣うごくに日なた
の匂ひ

室に入るすなはちばつと外光の匂ひを撒けりこの
看護婦は

したたかに天つ光を浴びにけむ人黄昏れてかへり
來にけり

病室は日かけるはやし濱べよりかへり來し人の顔
のあかるさ

外廊のかなたへ暗き草履の音しづもり寒く消え入
りにけり

病室の窓の玻璃扉にほとほと小夜の時雨ぞ忍び
來にける

雨かはた雪かも來らし寒明けの底冷ゆる日の二日
つづけり

りんとして霜冴えとがる庭松に百舌のこゑかも朝
なसान聞ゆ

啼きすてて百舌は飛び去りしけはひなり風らふら
ふと松に吹き起る

残り風松山ふかく吹きこもり時雨れむとしてゆふ
そらは雪

山風は磯松ばらに吹き落ちて外の面はくらし浪の

音聞ゆ

208 燈を消せば月の夜ならし吹き荒れし風は庭木に静
もりにけり

硝子扉に氷雨朝よりちしぐれ夕早くして電燈つ
きたり

寒明けの朝よ時雨れて火の氣もなく室はひそまる
まだ宵ながら

寒明けの雨ふり出せり退け室には看護婦たちのお
饒舌のこゑ

ひよろひよろと瘦松林あはれなり梢葉ひそかに時
雨るる見れば

へうへうと疎林の松をあらしかも根こじに揺りて
吹きあれにけり

風をいたみ大童なるをとこ松向脛にかく立ちあ
そへり

庭松は梢葉せうはともしみ夜半をなほ風にもまれてうな
り居るらし

夜をさむみすがら木がらし吹き荒れて曉あけしづもれ
ば寝入りたりけり

209 冬ざれの庭の瘦せ松まつかさを屋根に落せり今日
の寒晴れ

210 茅ヶ崎や浦吹きめぐる風の音を遠く聞きつつ晝食
すわれは

腹膜の痛みやりに烈しくなる

看護婦はいまだし曉あけぼのの寒床に醜みにくの腹膜いたみいで
にけり

今朝よりは仰に寝たまま附添にやしなはれ居り流
動食を

管で吸ふ野菜スープが一筋の青きにほひを曳ける
あはれさ

これの外に攝るべき糧のあらぬかも卵は無理に呑
みこみにける

下腹ゆ寒けく痛みひろごりて夜のほどろは妻戀ひ
にけり

しきりくる腹の痛みにちぢこまり曉あけぼのをさむみか鼻
ひりにけり

塗布劑を腹一面にぬりひろげちつと氷へ居る雪の
ふる日を

211

腹かたく脹りて胃の腑を壓す如し日がな朝より黙
りこみける

腹膜が氣になりつつも噛みしむるパンの小片のあ
りがたさはも

ここに來て知り合へる友の幾人かわれより若く死
に行きしかな

いくたびか看護婦かはれりここになほ身の在り經
むと思ほえなくに

この室にこの寢臺に吾がごとくまねく人々歎きつ
らむか

けながくも病み臥すものか夢にさへ歩み遅れてわ
がひとりなる

レウマチの疼みもあるかおほほしく今日は朝より
肩の凝りたる

看護婦よなどて笑はぬしくしくに吾が腹いたみ漏
ゆしおならぞ

讀みふけり疲れ氣付けば日肺熱八度を越えて口ね
ぱりたり

早寝して夜半の冷えにめさむれば海老にかも似て
足ちぢめるし

うつせみの夜さへ晝さへ夢にさへ思ひ耽りていま
だ飽かぬかも

海老のごとちぢみかがまり小夜床に庭松の風を聞き入りにけり

かそかなる命とぞ思ふあつぶすまちぢみかがまり夜も晝もなき

小著仰望初版成る二首

讀みゆくに臉はあつしつたなきは拙きながらうべしわが歌

心卷の集とし見れば過ぎし日の生きの勞れは絡まりにけり

新聞を読む二首

三とせ病みてうべぞうづなる新聞のラヂオの記事に見入りたりける

スポーツやラヂオやこゝだ記事の中に古りしおのれを凝視めたりけり

如月十五日鎌倉に静養中なりし木下利玄氏終に逝く未だ相見ざるに其人はや世に亡し乃ち病床君を悼み哀むの歌

沖つ風雲吹きちぎり大和田に浪立ちさわぐこのゆふべかも

相模洋うら風騒ぐきさらぎのもちに逝かせり花待
ちがてに

今宵かも鎌倉山に雪やこむひそやかに人は息絶え
にけむ

思ひきやおなじく病みて明け暮れのながめせしま
に君逝かむとは

朝にけに君がながめし山川のよそには戀ひつつあ
りとおほさね

あをやまを捲ける雲かも石走る谷のおとかも君が
み歌は

あさかけに消えにし露か夕山に入りにし星か君が
み魂は

またの世にもしか逢ひ見ば君も吾もとはに惱める
佛ならまし

二月二十七日富山縣内務部長後藤汀兄公用上京の途次この邊僻の療舎に吾を訪
ひ給ふ十年の故舊道を異にして遠く半日の知己縁に因て近し

身にしみて嬉しきかもよつかさびと暇なき君がわ
れを訪はせし

おほやけの君が心のかたすみにわが影くらく在り
にけむかも

218 仰に寢て語るに君の顔は見えず心し觸れてひそかに泣かゆ

何くれと話はずきね時の人せはしからむをはや歸りませ

■春日焦心

春日さへ心せかるれおほけなく見えわたりたる道のかそけさ

春日さへ心はくらしさくら花さかりのほどを熱の下らぬ

生きてあるほどに歸らなはし妻を都におきて月日過ぎたり

病める吾に寄るべ求めて歎くらむ家妻あはれ瘦せにけるかも

歸らむと心はせちにいそけどもわが足起つと思ほえなくに

藤十二首

219

いろあさく咲きしばかりや藤の花朝はやくして蜂の來て居る

蜂のこゑ日毎にせしがいつのまに藤棚の花の咲き
揃ひにし

むらさきの花房ふかくひそみ入り音のみうなりて
見えぬ蜂かも

おのづから視線は落ちて藤棚の藤の垂り花ねなが
らに見ゆ

咲きたれて藤の花房さゆらがすそこはかとなく春
も深みし

梅雨めきて今日も降る雨藤棚の花房重く咲きたれ
につつ

伸び伸びて棚を外れたる藤づるの庭松が枝につか
まりにける

ふさふさと藤の花房露を重み垂れしづもれり朝ぎ
りの中

夕まけて居残る蜂のいとなみにゆれてしづもる藤
の花房

松が枝に届かむとして藤づるの若葉あかるく宙に
泳けり

松が枝に蔓さしのばしあさぎりにしづく垂らせり

藤浪の花

夕まけてたゆき眼のやりどころ藤の若葉のいろの
あかるさ

五月二十七日退院歸京

命ありてえやは再び歸らじと吾もおもひし人もお
もひし

おほけなく生きてふたたび停車場の歩廊をあよむ
妻とならびて

そよせめて巷の裏の佗び住みに青木の梢そよがま
しかば

卷末記

その一

大正四年の秋、處女歌集「春の叛逆」を出してから、かれこれ八年に
なる。この働き盛りの八年間が、私に取つて如何なる生活であつたか、
「仰望」一巻の歌は最も正直にそれらの消息を傳へてゐると信ずる。

私は思ひもよらぬ病を得て、今なほ仰臥療養中である。やゝ病勢の險
悪であつた昨年の夏は、枕頭に歌稿を置いて、看護の目をぬすんではほ
つりほつりと整理を試みた。或は遺稿となつて友人の手で上梓されるや
うになるかも知れぬといふやうな不吉な豫感があつたからである。幸ひ
にも遺稿たるべき運命から免れ得たこの歌集は、舊題號の「一路悲しく」
を「仰望」と改めて、こんど世に出るの歡びに會うた。

八年間の私の生活乃至環境の變動が、私の内生命に影響を及ぼしてゐることは申すまでもない。大學卒業後、理想主義者の兒戯に類する出版業を振出しに、臺灣に於ける製糖會社時代、丸ノ内の一事務員時代を経て、仰臥靜養の今日に辿りつくまで、經驗だの、試鍊だの、さうした殊勝らしき名目の下に、いかに自信のない仕事に對して、空虚なる努力を傾けて來たことであらう。而かも一とたび謎のやうな畏のやうな結婚の破綻に愕然として内面的に目醒めた私は、そのとき初めてフリジヤの花の幽かな、そして強い匂ひの中に救はれてゐたのであつた。祈願と闘争との苦しき一年が過ぎ去つて、私共の小さい樂園は建設され、さうしてそのフリジヤの花のやうな愛の手に依つて、私の心の痛手は洗ひ淨められた。過ぎゆく青春を呼びとめて、燕の唄に聞き入るほどのほのかな幸福をさへ、二人は取りにがすまいと互に努力を惜まなかつた。

過去を顧みれば、感傷的な一路蜿蜒としてかなしく續いてゐる。未來

を仰望すれば、浪漫的な憧憬が曙のやうな光を投げかけてゐる。旅人は早くも疲れてゐた。あるときは病み衰へた自己の肉體を過去の象徴としてうち眺めつつ、危くも無抵抗主義の世界に身をかくさうと試みた。あるときは力ある曙の光を未來の暗示としてうち仰ぎつつ、おほつかなくも環境に對して積極的に個性の擴充を試みた。而かも現實の自己に還れば、そこには廢殘の瘦軀と、それを看守してゐる知識の眼が宿命を物語らうとしてゐるのであつた。私は今以て弱者たることも出來ず、強者たることも出來ず、その中間にさまようて、縮められたる一生を妥協と彌縫とで以て塗りつぶさうとしてゐるのではないか。

しかしながら、私のかうした現實生活に在りて、私にとりては絶大の生命力となり、而してその生命力を活躍せしめ、たまたま自由無碍なる境地に引き入れて、個性の伸展を遺憾なくせしめてゐるのは實に歌そのものであつた。何といふ悦びであらう。見よ、私が歌ふことによつて、

言葉そのものに生命が宿り、私が歌ふことによつて、私の生命が躍進し、展開されて行くではないか。私はこの歌の世界に於いてのみ、何の氣がねもなく、のびくと思ふ存分に個性を強調することが出来るのである。さうして現在身に大患を宿してゐることをすら忘れることが出来るのである。見えぬ教會がそこにある。見えぬ佛像がそこにある。心の奏樂が、魂の禮讚が——。おうこれが悦びでなくして何であらう。さうだ、この悦びの中に、私は死ぬるまで歌ひつゞけることが出来るであらう。

今日の命を拾ひ得たのは、ひたぶるなる妻の看護による。一度ならず、妻よ私はあなたの手によつて救はれた。この歌集の中にはあなたでなければ分らぬ歌があまりに多く含まれてゐる。この一巻は謂はばあなたに對する私の貧しい心のプレゼントだ。今こそあなたは微笑んでこの贈物を受けらるであらう。

大正十二年三月房州館山の客舎にて

著者

その二

昨年春、房州から歸るとすぐにも歌集の出版に取りかゝるつもりでゐたのが、恰も花時の不順な氣候にあてられて、毎日のやうに熱發し、それに小さいのが麻疹に罹り、経過がわるくて肺炎を引起し、終に行年三歳を一期として死んでしまつた。五月の朔日であつた。翌々日親戚のものに尾上博士夫人と水養社の小泉君を加へて十人足らずのささやかな葬列の伴を送り出した時、私の心は荒れたる庭の如きたよりなさの中に横はつてゐた。それからといふもの、私の病氣はだんくくと悪化して、朝から晩まで高熱に悩まされながら、三伏の暑熱と戦つた。やうく八月の末になつて、熱がやゝ下つたので、醫師の勧めに従つて茅ヶ崎の南湖院に入院することとなつた。水養社の事務一切を岡野君に引次ぎ、一年あまり臥て暮した根津權現上の家を疊んで、心も身も軽く東京を離れた

とき、私は既に心の奥に期するところがあつた。入院すると間もなくあの大地震に遭遇したのであつた。危い命を拾ひ得た感謝の心——さうした心持で湘南の秋をしみくくと味ふことが出来たのは、私の生涯でまたとない悦びであらねばならぬ。

陰惨たるサナトリウムの寢臺の上で、大正十三年の春を迎へてから、病勢は急に暗い方向を指して構はずに進行をつづけて行つた。今度といふ今度は駄目らしい。ひそかに覺悟をきめて、時の來るのを待つてゐた。永遠の生命へ向つての憧憬——さうした悟入の境地ではなしに、果てしなき魂の疲れ、或はさう云つた方が適切かも知れない、ただ何となく現世的な生死を超脱した氣分で、死に隣接する程の肉體的苦惱を眺めてゐたのであつた。二月三月、この湘南の地にも屢々雪が降り雪が積つた。四月五月、草は青み鳥は啼いて春は南向きの硝子窓を訪れた。然し私はまだ起つことは出来ないのみならず、次から次へと餘病を併發して、日

夜高熱に呻き、胸痛を訴へた。歌集の刊行を思ひ立つたのは實にかうした時であつた。二三の友人から編纂の勞を取つてもよいと云ふありがたい好意を寄せて戴いたが、多少の無理は押ししても、自分の手で是非とも整理したかつたので、やや氣分の軽い折を見ては、筆を取り筆をとりして、ともかくも約一千首の中から八百首だけ抜いて、やうく七月の初めに脱稿することが出来た。

死に急ぐ心ひたすらみづからの歌集を編むと
人知らざらむ

この集の成らむ日までは玉の緒の仰ぎ願はく
は生きてあらしめ

この心持に虚偽はない。全くのところ、私はこの原稿が自分の手で完成するであらうか否かを氣づかつてゐたのである。原稿は出来上つた。何といふうれしさであらう。印刷にならうが、なるまいが、そんなことは

問題ではない。親鸞の天に躍り地に躍るといふ形容をこんな所に用ふることを許されるなら、正にそのうれしさだ。

終りにこの歌集は恩師尾上博士を初め、岡野、細井兩君他水養社内外有志の甚深なる御同情と御援助の下に上梓されるのであつて、謹んで茲に感謝の意を表する次第である。

大正十三年八月相州茅ヶ崎南湖にて

著者

仰望再版について

曩に水養社の好意で仰望を上梓した當時、私は入院中のことでもあつたし、一切のことは水養社任せであつたので、経費等の都合上部数を極度に切詰めて、寄贈もほんの一部の人々に止めたのであつた。素よりこの小著がさう賣れようとも思はぬが、しかし今まであまり私の歌に親しみのなかつた人、又は親しむ機會のなかつた人で、歌集の出來たのを幸ひ読んで見たいと思ふ人も多少あるやうだし、又私の方から是非読んでいただきたいと思ふ人も少くはない。こんど長い病院生活を切上げて歸京したのを記念するために、この再版を思ひ立つたわけである。

初版の歌は續茅ヶ崎日記の松風六首を以て終つてゐるのであるが、私の茅ヶ崎に於ける療養生活はそれからまた一年餘りも續いた。再版にはその間の新作百餘首を追加し、序に全部改版して體裁も多少變更するこ

とにした。

私はこの小著がなるべくなら多くの人によつて讀まれんことを希んでゐる。或は古本屋の店頭に、或は縁日の露店に曝されて、それが篤志家の手に依つて掘出されるであらうその日の幸運をさへ希んでゐる。

大正十四年八月駒込の寓舎にて

著者

大正十四年一月十五日 印刷
大正十四年一月二十日 發行
大正十四年九月二十五日 増補印刷
大正十四年十月一日 再版發行

(定價壹圓八拾錢)

著者 岩谷 禎次

發行者 富永直樹
東京市牛込區甲良町二十三番地

版權
所有

印刷者 一噌定次郎
東京市芝區兼房町十五番地

發行所

新詩壇社

東京市牛込區甲良町二十三番地

振替東京三一〇〇四番

544
108

終